

# 栃木県宮陵会 総会・忘年会で展示した蝶の標本12箱の概略説明 ①

令和6年12月14日 1/2

瀬在 宏

蝶は鱗翅目(翅に鱗片がある)の昆虫で、蛾の仲間の一部に分類されます。日本全国で蛾は約10,000種いるのに対し、蝶は約270種と少ない。栃木県内では更に少なくなり約130種が生息している。(注)種類の数については、環境の変化で絶滅したり、温暖化に伴い増加したりする場合があるので概略とします。

アゲハチョウ科の仲間	主な食草	概略生態	越冬態
1. ナガサキアゲハ	ミカン科(ナツミカン・ユズ)	年3回(5月~7月~9月)	蛹

熱帯系の蝶である。20年前には栃木県では見られなかったが、山梨・長野・埼玉・茨城・栃木・群馬と北上してきている。自宅のミカンの木に産卵しているのを見かけるようになった。日本産黒色アゲハ類では有尾なので、一見して判る。♂は黒で♀は前翅に赤三角。後翅に白斑が並んで飛ぶ様子は綺麗だ

2. モンキアゲハ	ミカン科(ナツミカン・ユズ)	年2回(春5月~夏7月~)	蛹
-----------	----------------	---------------	---

熱帯系の蝶である。栃木県でナガサキアゲハより先に現れている。後翅には大型の白斑が見られ、飛んでいると一見して判る。白斑が猫の目みたいに光るからだ。だから、街中に飛んでいるのを時々見かける時がある。2年前に、初めて自宅のミカンの木に産卵しているのを見かけた。大切に育て標本にした。

3. キアゲハ	セリ科(ニンジン・セリ)	年2回(春5月~夏7月~)	蛹
---------	--------------	---------------	---

北海道の一部を除いて全国に分布する。セリ科の植物は農家で栽培する他に、自然の中に沢山生えてるので食草には困らない。街中でニンジン家庭菜園すると緑と赤と黒のあまり可愛くない幼虫がいる。一般に夏型は♂に比べ♀は特に大型になり、黒っぽさが出て、♂・♀の判断は容易だ。多気山の頂上は春ツツジが咲く。特に山頂の草原を占有する習性があるので採集に最適。自宅ではセリに産卵したので飼育した。

4. ジャコウアゲハ	ウマノスズクサ科(ウマノスズクサ)	年4回~5回(春5月~)	蛹
------------	-------------------	--------------	---

東北地方から南方に分布する。奄美諸島には亜種といって翅が丸い。食草のウマノスズクサは少し毒性を持つ。(結構臭気強い)成虫は一種の香気(ジャコウ)を放ち、ジャコウの和名が付いた。幼虫は体に突起を持っていて毒々しく、共食いもする。薄茶の♀は長い尾状突起をゆらゆらさせながら穏やかに飛ぶので優雅で好きな蝶だ。残念ながら今年は自宅で見かけなかった。幼虫はアゲハの仲間では特に異色である

シロチョウ科の仲間	主な食草	概略生態	越冬態
1. モンキチョウ	マメ科(コマツナギ・ウマゴヤシ)	年4~5回(春4月~)	幼虫

日本全体に分布している。街中ではなかなか見られないが、食草がある田園地帯には盛んに飛んでいる。他のシロチョウと違い、飛び方が速く一見して判る。昭和39年、最初購入の図鑑では♂は黄色、♀は白色と記憶していたが、昭和51年度版では黄色の中に♀も存在し判別は慎重にと記載があった。毎年数頭づつ採集していると確かに黄色の♀がいそう。♀の翅は丸い感じであるが、慎重に判別する必要がある。

2. ツマグロキチョウ	マメ科(カワラケツメイ)	年3~4回(6月~)	成虫
-------------	--------------	------------	----

本州の暖かい地方に生息するが、東北地方にはいない。県内の分布は殆ど平地である。食草は名前の通り、河川沿いに生えていて、幼虫はこの草しか食べない。小貝川・鬼怒川・那珂川の各水系には見られる。市内では、富士見台ゴルフ練習場にカワラケツメイが生育していて成虫を採集した事がある。もう一か所は東武電車、日の出町ガード脇だ。何れも除草剤で絶滅した。標本は越冬成虫(退色している)から、5月頃からの夏型、9月頃から秋型に変わって、成虫で越冬する、冬の寒さに耐えていけるか、個体数は減っている。

3. スジボソヤマキチョウ	クロウメドキ科(クロウメドキ)	年1回(6月中旬~7月)	成虫
---------------	-----------------	--------------	----

県内では、日光・塩原・那須・足尾等の産地帯で見られる。7月に多くなる。暑くなると仮眠するのか姿を消す。9月頃になると現れる。しかし、裏面などにシミが発生し汚れた感じとなる。10月頃から再び姿を消すが、越冬の準備を開始するのだろうか。ヨツバヒヨドリの花で静かに吸蜜している姿は品があり美しい。

テングチョウ科の仲間	主な食草	概略生態	越冬態
1. テングチョウ	ニレ科(エノキ)	年1回(6月~)	成虫

テングチョウの名前から、天狗猿、天狗、鼻の長い怖いことを想像すると思います。口吻というか、下唇から延びる突起が左右に合わさり頭の前に突出して見えるのでこの名が付いた。毎年6月になると東刑部に採集に行く。エノキが生育する河川沿いの砂利道の地面に、吸水している姿は黒い小さな三角石に見える。

羽化してしばらくはその周辺にいるが、その後、山の方へ散らばる。いつも飼育し、観察したいと思っていた所、幸いに自宅のエノキに産卵しているのを確認、大事に育てた成虫は標本の中。60年前の標本もある。

タテハチョウ科の仲間	主な食草	概略生態	越冬態
1. ミドリヒョウモン	スマレ科(タチツボスマレ)	年1回(6月中旬~)	卵か幼虫

日本全国区の蝶だ。県内山地に広く分布し個体数が多い。6月中旬頃から出現し10月頃まで飛んでいる。酷暑になると仮眠し姿を見せない。涼しくなると再び出現し、やがて産卵する。普通の蝶は、食草に産み付け、雑というか何にでも出鱈目に産み付け、食草に産み付けない。孵化した幼虫は母の優しさも知らず耐えられない試練はない、食草を探し自力で生きよ。スマレの種類は多種あるから食えど。私の記憶に、愛好家が飼育箱に4種類の異なるスマレを植え、幼虫を放した。1番好きなのはタチツボスマレで、完食すると、2番目のスマレに移動、完食すると3番目に、最後に食べたのは嫌いだったかも知れない。死ぬかと食べ成虫に。記事を読んだ感想だが幼虫は好き嫌いがあっても遅しい。ふと、人間だったらどうなんだろう。

2. コムラサキ	ヤナギ科(シダレヤナギ・ゴメヤナギ)	年2回(6月~8月~)	幼虫
----------	--------------------	-------------	----

本州には普通に見られる。ヤナギ類を食樹とする。県内の分布は食樹が多い、河川や沢、湿地に限定され、平地では局地的になる。♀は♂に比べ翅表の色が淡色で、ムラサキの輝きは無いが、♂の翅表には光線の方向によってムラサキ色に輝く。褐色型と黒色型(遺伝性による)の2種類が存在する。宇都宮市の柳田公園には黒色型(クロコムラサキと言う)が発生し、市が保護地域に指定し地域の方々が管理している。和名のコムラサキは国蝶のオオムラサキの大型に対しての言葉であるが、オオムラサキの紫は光輝く事は無く、コムラサキは飛んでいる時にもムラサキが反射して見える時があり綺麗である。ミズナラ・クヌギ等の樹液好んで吸う。最近市内の愛好家が新しい地域にクロコムラサキの出現率が高い地域を発見した。その後にすぐ整地されてしまった為に、絶滅した話を聞いた。貴重な資料だっただけに残念なことである。

3. オオムラサキ	ニレ科(エノキ)	年4~5回(春5月~)	幼虫
-----------	----------	-------------	----

日本の国蝶です。切手に採用されています。飛翔している時はジェット機のようなスピードがあり、捕まえて胸を押しても気絶もせず、か弱さは微塵も無い。幼虫の時から葉上で俺が蝶の王様だと堂々とした態度。正面から見た2本の角は、意外と愛嬌があり可愛い。成虫はミズナラ・クヌギ等の樹液を吸う。樹液に集まるスズメバチ等翅で追い払ってしまう。各地でオオムラサキの保護活動がされていて、ごみ処理施設のクリーンパーク茂原には建物や煙突にオオムラサキをデザインしたマーク、オオムラサキ保全地があった。標本の中で紫色があるのが♂です。その中に青系メタリック系の蝶が2匹(専門的には2頭と言う)います。流紋は突然変異で現れたもので、後翅の白斑が流紋(斑点でなく繋がっている)になっている。反射するムラサキは遺伝である。福島原発事故が発生した年で、放射能汚染が影響したとは思えないが、10数年屋外で飼育し、この年だけ異常が発生した出来事は、貴重な資料と思う。(内容は月刊むし・No.493に掲載)、採集地は宇都宮市です。仕事で長野県に行った時、採集禁止に指定されている事を初めて知った。氷室では小学生を対象にオオムラサキの放蝶会を行っている。最近宅地開発で多数のエノキが伐採され幼虫の段階で既に減少しているのを、保護を行っている関係者は成虫の減少を心配している。

4. クロノマチョウ	イネ科(ススキ・ジュズダマ)	年2回(夏型6月~秋型9月~)	成虫
------------	----------------	-----------------	----

昔はヒカゲチョウの仲間であったが、日本産蝶類標準図鑑2006年8月初版が発行され、タテハチョウ科の仲間になった。生息場所は森や木立で、林内には殆ど日光が通らず、イネ科の植物が生育している池の周辺と想像できる。夕暮れに活発に飛ぶ。まさにヒカゲチョウの仲間の生活だ。南方系の蝶で、前記の図鑑では緯度35度くらいで、本州を南と北を分断した、その南方に生息している。県内には生息していない事になっているが、温暖化で県内あちこちから目撃・採取した記録が見られる。私は残念ながら未だ見た事がない。成虫は子犬の目に光が当たっているように、可愛く思えた。

今回の標本は、愛好家で飼育の名人から数mmの幼虫を戴き、大事に飼育して育て、成虫を標本にしたものである。幼虫から脱皮した抜け殻と、蛹の抜け殻を標本箱に入れた。新発見でもしたように感動を得た。飼育する際に、街中で近くにイネ科の植物の有無を確認した。小さな幼虫はイネ科のネコジャラシを用いた。自宅近くの空き地には沢山生育しており問題ないと考えていた。1本、1本集めると、小さな葉は2~3枚しかなく、常に自然と同じ条件が必要で、採取の大変さに加え、水の吸い上げが悪い事も理解した。幼虫が大き育つとススキを用いた。食欲旺盛で葉の中心にある葉脈を残し両側を綺麗に食べる。残された葉脈はまるでフェンシングの剣だ。次はジュズダマだが、分譲されるので刈られてしまった。仕方なく近くのゴルフ練習場に大きな幅のススキがあることを発見安心した。どうぞ、どうぞ自由に持ち帰ってと言われ、更にコーヒーをご馳走になった。後日、標本を持参し見て貰いました。本当に感謝した飼育物語です。

ちなみに飼育の名人は翌年、クロノマチョウを採集した場所に観察に出かけたが、成虫は確認出来なかった。やはり成虫で越冬するには、寒さが厳しかったのか知れない。

# 栃木県宮陵会 総会・忘年会で展示した蝶の標本12箱の概略説明 ②

1/2

アゲハチョウ科の仲間	主な食草	概略生態	越冬態
1. アオスジアゲハ	クスノキ科(クスノキ)	年3回(春4月～7月～9月)	蛹

樟脳(クスノキから採れる。)は昔から防虫剤に使用していたので、神社、城、薬品会社等に植えられている。他のアゲハと翅の形が異なり、いかにもスピードが出る翅の形だ。中々捕らえられない。宇都宮市ではクスノキは二荒山神社、市役所、NHKにある。後翅根元に白い毛が生えているのが♂(オス)です。

2. カラスアゲハ	ミカン科(コクサギ・サンショウ)	年2回(春5月～夏7月～)	蛹
-----------	------------------	---------------	---

今回の展示は春型(越冬蛹から羽化したもの。)で小型です。夏型は暖かになるし食草も豊富だし大型に。採集地は殆ど宇都宮市です。♂と♀(メス)の判別は前翅下側に黒の性斑があるのが♂です。♀は何となく丸みを帯びて優しい感じ、しかも綺麗で(人もこの様であれば?)蝶愛好家の仲間では人気。翅の色は緑系・青系・赤系と個体差があるので、採集が楽しみとなります。

3. ミヤマカラスアゲハ	ミカン科(キハダ)	年2回(春5月～夏7月～)	蛹
--------------	-----------	---------------	---

今回の展示は春型です。カラスアゲハと似ていますが、前翅・後翅に1本の筋が通っている様に見えるので、カラスアゲハと違う事が判ります。私は、この春型の蝶が1番綺麗だと思っている。春になると多気不動尊の城跡の頂上(376m)迄の登山?が、私と妻の健康バロメーターとなっている。頂上には小さい草原と小屋が有り、周囲にはツツジが咲いている。小屋で待機しながら蝶を収集する。名前の通りミヤマは(深山)の意味である。春型の蝶は涼しい山地へ行き産卵する。大型の夏型が発生する。採集は山地となり、吸水する姿を見るが出会いは少ない。夏型の♂は綺麗な蝶として日本代表である。

シロチョウ科の仲間P	主な食草	概略生態	越冬態
1. ツマキチョウ	アブラナ科(ハタザオ)	年1回(春4月～)	蛹

シロチョウ科の代表はモンシロチョウですが、この蝶は春だけに現れる。採集地は殆ど宇都宮市です。翅の形に特徴があり、品と可憐な感じが私は好きです。飛んでいる時はモンシロチョウと同じく白に見えるが、飛び方の違いで見分けが付く。翅のつま先に橙黄色があるのが♂です。翅裏面の緑模様が綺麗。

シジミチョウ科の仲間	主な食草	概略生態	越冬態
1. ミドリシジミ	カバノキ科(ハンノキ)	年1回(6月～7月)	卵

採集地は宇都宮市。♂(オス)はメタリックの緑色で見える方向によって輝きが違う。♀(メス)はO型(一樣に褐色)・A型(前翅に橙色の斑)・B型(前翅に色々な青系の斑)・AB型(前翅に橙色と青系色の斑)の4種の変異型が現れる。人の血液型と同じく決めた人が面白い。O型が一番多く、AB型が少ない。昔、砂利道の柳田まで自転車で採集に行き、光輝く♂を初めて網に入れた時の感動今でも忘れません。

2. シジミチョウの仲間	色々の種類が入っています。左側が♂・右側が♀。♂が綺麗と思う。		卵
--------------	---------------------------------	--	---

写真はミヤマシジミ。ミヤマは「深山」の意味で、一般的には標高の高い場所に生息する蝶に付ける名前なのに、鬼怒川の河川沿いの平地に生息している。5年前に大被害を受けた台風19号で、幼虫や蛹が流されてしまい写真撮影した場所は絶滅となった。今回展示したシジミチョウは41種です。採集先は栃木県。キリシマミドリシジミは卵(箱根産)から飼育した。裏面が綺麗なので羽化に失敗した裏面半分を展示。ミドリシジミ類はゼフィルスと呼ばれラテン語でそよ風の意。梢を爽やかに飛ぶ。

タテハチョウ科の仲間	主な食草	概略生態	越冬態
1. ヒオドシチョウ	ニレ科(エノキ)	年1回(6月～)	成虫

幼虫はエノキに団団で生活するが、蛹になる時は分散する。羽化した成虫は当初その近辺に見られるが、暑くなると休眠し、姿を見せなくなる。和名の由来は、緋緘(ヒオドシ)の鎧(ヨロイ)の濃い赤色に基づき命名されたと言われている。涼しくはると散らばって活動するのだろうか、時々ゴルフ場で見かけるが、中々出会えないのである。翌年、初夏迄生きる長寿の蝶である。春産卵し新成虫は6月出現。

羽化を予想しヒオドシを採集に、桑島の鬼怒川に妻と出かける。車でゆっくりと川沿いの砂利道を走っていると、50m前方路の上にちらちらと赤く見える蝶が飛んでいる。日光浴か吸水か。車を停める。妻は早速捕虫網を持って採集に行く。近づくと蝶は数m逃げ、近づくと逃げるを繰り返す内に、前方から砂利トラックが現れた。妻は採集となると、そこしか見えない所があるから、轢かれてしまうのではと当初心配した。今は顔なじみになりトラックは停車し、採集するまで待っていてくれるのである。何か運転手と話をしている。この先に同じ赤い蝶が飛んでいた情報までくださったそう。しかし、ここ数年発生数が減少しているのが心配だ。今でも、砂埃が酷い道なので、車で出会ってもスピードを落として通過して下さるので感謝である。